開卷驚奇俠客傳

第四集

叁

ヘ乙13
1245
18

1245
18

巻驚奇俠客傳第四集巻之五

東都　曲亭主人編次

第二十五回　主婦を柱ふと筆柿賊財を分つ　残盗を誅しく就盛放免を置く

再説遊佐就盛。當晩十個の力士を擇まそ究竟の家隷をりける。小山岡作就安を緝捕の頭人ふ相定め湯浅風爐八郎敦義と共侶ふ楠正直の宿所ふ赴ゑて五十槌電次隆光を捕るべ。その所以ハ徒々箇様々々と吩咐るふ准備ゑも敷ゑれば就安その暁天ふ十個の黠兵を俱ゑ齊一城を出る程ふ敦義ハ是答のよりと主の正直ふ報んそ再番馬ふち騎り。就安ハ先ふ河備を投て走りけり。徒而又就盛ハ隆光が宿所ふ残盗を捕て那賊巣を掃んそ猛司ふ士卒を召聚るふ敢亦時を移さぬその勢約百五六十名。黎明ハ時候城を出て千剣破村ふち向ふ主従鷹野の猟将裳束ゑ時分を料り左右ふ進ませ馬を駐く郊外ふ在。先間諜者ゑそ那里の虚実を覘ふふ隆光が宿所を出て河備の〻ゑ〻ゑそ快知せよそ遣りけ。

その折就盛あの者ら正直の河備の宿所に千剣破村遠くまで隆光が事の敗を餘賊ども知らば逃るとて
るるまの隊其頭の部を甚だ網を漏る魚あるべしと尋思とまる。壮健なる士卒五十名ばかりを悄々
地に件の村遣し村長を眼よまそ村の出路を捕固。倘脱出残党あらば搦捕べしと下知せる。
五十槌電次隆光は昨日大く疲労れる假寐の枕べうまそ下晡を覚るに獨荷三郎は恥もなく那正真遊
佐の城より既に帰り来りけ欲那里の動静を探んそ出て出発よりを待て有理と思て疑らぬ左右もする程に
日は暮てその夜初更の半時候に荷三郎は稍かの者隆光に報るやう在下河備の頭に適て那里の動静を
覘ひに正直主の命ぜ還らぬ姑且其頭を徘徊つ甲夜過るまで等程なく帰宅せられる翌も亦
所要あれば午牌より遊佐邁のとに伴御の警せと正司に听て出発せば翌未明より起出て准備を整大約
辰の左側に河備に赴くべ那人必在宿をれば對面障りなべ。実事に成る其くに隆光听て點頭て考
らば翌夜風を邁に紋二が細工とある姑麿姫のを実も整ちよく似たる欲相とにて躯て三里相より。
生を荷三郎受合て燈の下にて所出両三番得と見て迹のるに好ら欲辨へ知るべ我るれども似るとに

似ちに紋二の現然るのるるに那旗と共伯に遞與てと告あば計較必成就は吁愛と哄誘せば隆光
さ然りと惟ば既に東西に敷平れども折るのるれば尽小心に考てる。伴當に誰を欲得ばて可らんやヨ
くに皆是痩肩とに荷三郎はあへも亦擇ぶに及ば在下に幸に這身に稟る金瘡る。伴若
黨に打拉て從ひ来ば支足でも人數ヨくば疑を釀る端ばべ。とに隆光は領て和殿從ひ行るべ
も百騎も優へけれども鞋奴も多く稱ぶ中に小紋二の痩を肩ば心も利ら他を奴隷に打分て和
殿と俱ねて這餘のに徒と諜し合に紋二も招せるに密説も既に果べ荷三郎は
辞退て躯て臥房に入れば却説の詰朝隆光は未明に小嘍囉を呼覚て薪水を急ぎ早飯を
程に長總に隆光は被を衣裳を問ら出ま印籠扇子も生常に心を付て好るに擇む外物を飾
草昨作る計較の術に那里行れば慈を轉て欲に做べ朝出立果敢るも憑を小嘍囉
さ這那とに合笑まに勇に准備も整る秋の旦の冷れども礼服れば襲も甚隆光は
縹色に回の花鞆附る綯の麻衣に濃葱の社祢を被領て短刀を腰に跨朱鞘の脇刀を引提る。

長總ふ留守と委ねて、やや立ち玄関前に荷二郎い芭蕉布の袴を膝頭まで綾含寒げて那旗と偽書し箱の袱包両ふ提含て小紋二と共侶ふ跪踞て目今出でゆく主の後方ふ従ひ居りその時朝日縞ふ昇ぬ路ふ小草ふ乾露を隆光い拂ひもあへぬ足ふ痩せ衰ひ隨ふ連りふ出でて正直の宿所近くまりーゑ懐る畳楮より出る名簿を荷二郎ふ遞与しく先走らゐ隆光告訴のようあそ見参と請ふとのゆせふければ湯浅敦義出迎へて提接の若黨と倶ふ玄関の式臺ふ在り侍りー程ふ荷二郎い又直走りふ引返しー来て隆光ふうち對ひて那里ふ障りいぬ五十槌申ふの高名ゑ誰を知らぬものもなければ正直對面せるべーとゐられてそいられとふふ隆光然もそと含笑ゑゐ領ゐ又荷二郎と後方ふ立して前ハより找ま入るふ花嘗若嘗黒式甚室の左右ふ出て迎へーゑ隆光い正真の已と知と笑ひ閑ゑ及管待を然ぶて毫なりも疑ふぞ最尊太ふ敦義們ふ揖をゐ侍々と名告て對面を請ひけり敦義出でうち雪て貴翁の武名い豫より聞知られそいふ告訴とあれば時と移さず對面の准備あへ卒這方へとゐ立んとせと隆光いやよ小霊妻時と推禁めて在下告訴の義ふ就て御主人ふ見せまゐ〜ゑる東の西と廂ーいぶも外人ふ遞与ーがゐ他い野老の弟子若嘗黒ふ木綿張荷二郎と喚做まゐ〜敦ーゐまゐん次の間ふ召置ゐべゐのやとゐふ敦義異議もなくゐゐ主従倶ふ快々とゐ荷二郎もうち雪て找と寄々敦義ふ然ぶ舒べ結を解と袱包と恭ーく撲へゐゐ隆光の後方ふ跟ひてゐ俤ふ玄関ようち登ゐふ隆光い上坐ふ在り荷二郎い楮育と隔て各坐とゐれば敦義い奥ふ退りて姑且しく又出て来ゐ隆光ふうち對ひて夫公羽来意の趣ゐ郎便主人ふ申ふせーふ面會の折听べーと既ふ出席致されゐ卒快々とゐがしく先ふ立ち案内をまれい隆光短刀ゐ身と起せば荷二郎も件の裏と含揚て躱て後方ふ従ひけり登時五十槌隆光い湯浅敦義ふ誘りれく書院のくふ赴く程ふ長く小間と廊下あり左右ふ幕を垂れば忽地ふ疑心起りて四下と伝とゐゐる程もあらぬ帷幕の蔭より突然とく顕れ出る緝捕の力士十名許御説ぞと呼ゐ吸かけるゐく十ゐと内めりしく打倒さる前後より競と蒐れば隆光い駿と奮ゐ些も怯ぬぞゐゐ為ゐと接ふ暇ゐけれ左右の袖と働かて受ゐ拂ゐ力ふ儘しく前ゐ組むと揉返ー後ゐ組むと蹴倒ーゐる武藝勁勇九庸ゐれば許ゐ士們度と失ひ或い投げ或い蹴躓れ一騎駿ゐる廊下ふ入ヨければ打撣しく甘術ゐ為ゐ荷二郎い袱包を後方ふ撲地と投遣て走り蒐ゐ隆光。利ゐ今ゐんと背ゐ組むと隆光ゐゐて原来這野狐奴ゐ誘て

我を賣るかと罵る聲と共に伯の身を操返し荷二郎が項を抓て投げられ傍の幕をうち越て檀と中
て身は板壁に腰を折て平張くる。京急られば緝捕の頭人小山就安這里に在りと名告も果ぜず十の
光りは隆光を横身を反せを横ざまに引組で上をうつ又下に布れ小山と隆光楚と押へて刃を接んと柄に手を撫るを
就安のあぶを抓で反復さえと挑めども士卒齊一敗績の勢に禁むべもなく殿の間に綱寂る正眞
吐嗟とばかりあるに堪ぬ若黨に持せ短鎗を搔合せて走出る聲を被て隆光が脇腹を蛭巻逼て馬鞍
刺せ殿所の深疵に衰りて後に找む湯浅敦義走蒐て隆光が頭髪を抓で曳倒せば投折れて力
士們も就安も稍身を起て推累りて隆光に索を極て牽坐げ話分両頭這時鞋奴に打扮く隆
光に倶して來る筆柿小紋の門内に入て発架に獨坐を樹て在り隆光荷二郎們が坐て來りて
だ人かと忽然として奥の方に許多の人の叫ぶ聲響亮高く聞えて驚き走て耳を傾け
聞よく聞くに是殺伐の鬨ぜ紛ぶべもなく虎れば肚裏に知り原来計較の敵に機密を盜猜
せられ狡頭領も木綿張の捕るべきを虜と這里に在りぬ縲絏に身を繫れて刃の

鎖に縛られんを支の茲に既に前に千劍破の宿所を走れば伏家と俱に有財を攫て後悔其
首に達かで嘻小也と大速の分別を仆て踵旋て走去んと程門卒氣色に猜けば遽も過ぎ拔
禁めを和郎何処遁んと五十餘生の伴當に外に出ると隊を吩咐れる我に相公の免許を
受ぎて何で國を踰ぬと腕を振解て逃足踏ども阿容る色なく何を
物々や大爺の安に等木樂しる前夏の町に酒肆に小平合酒を喫んとの呼と程る法やある身の是阿
客の伴當に相公の免許の用るとは妨げまじと敦圉猛く撲て撲地と突倒て足に信て逃でもくを
門卒に禁んを身を起て六尺棒を引提て透ず追蒐て小紋の足音の近て仆とんを今
あの老奴に殿る仆ぎ後よりも亦加勢の奴們が來て支の難義に那奴を結果て後安く走る
べと長くて程に追蒐る門卒に持る棒を合て直に鳥僕逃と逃ぬと四馬の走る小紋の頭を
望で殿んと找む小紋に向て退外に棒を抓で曳引く邸舍に合れ門卒に年齢五十に餘て微
力の悲に為の爭ひ難て俯覆に曳仆されて苦と叫ぶ藤に撫け立んを小紋に奪合る棒眞額に振

晩翠堂印發

抗て丁と敲きゝる拳の冴に憐むべし門卒は天窓を酷く敲き破られて呍と一聲呻きつゝ身を反して仆れたる小絞二これを見て女夫は又も追隊の莵ありやと思へば棒を身の護にしつゝ侭肱腋に搔掲て飛が如くに逃去りけり介程に千剣破村なる五十槌隆光が宿所なる長總并に七八個の小嘍囉們ら聚合て隆光が河備の首尾を思ひわづらふにやゝ更て左右も右もあるべき秋ならねば悄然と共侶に噂すと見れば影を刺も朝日は高く昇ぬ時に候外向より登足然と人の足音近づくを誰ならんと見る程しもあらで走入れる小絞六は持たる棒を庖湢なる框に哩と投棄て蒼惶地に走入て坐席に聚合し甲乙と見るに気まづく咬しく足を蹈も留めず忽地癈と平倒れて噫苦しや湯まれ水もてよと一滴去く飲せよと声に聲喘み艱難しと大家吐嗟と駭きて倶に勧る手繰の介抱鑵子の朝茶に水加て薦る茶碗の磨るも徃亡日欤と村胆の心に拭る那里の首尾を問ども答も山梔子に凾禁めて額の汗を拭遣ひて舌に塗よる定心丹の效験も目に見えて去る小絞六は喘僅に定りて膝立直せば長總も小嘍囉們も左右より筆柿心地は甚麼ぞや何事ありて還りたる快報なりやと諸聲耳に問ふを小絞二推禁めて噫味や問れずとてありけて克く那里の凶変その故は皆又箇様さくの情由なれば我推量に違ずして大頭領も木綿張も搦捕られし欤數せれし欤所詮還る端有かくる

既にその機を猜せし折倘虐ると那里に在らば倶に釜中の魚となるべし夷の我身に既ぬ前に走らかゝて是等のよしを和主們にも奥さまにも快報なせと尋思して走去んとせし程に門卒奴が推禁めて相公より豫五十槌の伴當を外に出しそと仰付られたり然れば御免なされよ一歩でもこの閾を踰せじと噂く程に庭に突倒して走すを猶も追莵来ぬ素奴が棒を奪拿て只一敲に俛仆しつる痛痍なれば息絶けん然ても火急の邪魔を攘ふて立かへると思ひにもあまりに酷く走りしかば息も五臓を疲らして些も似ず歩の遅くなりき和主們の介抱に遇ひにたり悦れ這里へも退さば緝捕の大勢推莵来るべし在る盤費を配分して他郷へ影を躲すべし亦一網に擭れん奥さまよ由もなき歎きに時を移されなば誰か一人も脱るべき鍵はあらん身の腰に在らん快圓號を送るべく出して逆旅の準備をせめよやと語言煩しくいぞせば大家ひとしく膽を潰してそれ／＼とどろに呆れて腰を抜せども落着るは一期の急難才も不才も活路を索る外はあらざりけり中に長總は虚憑ある計較の支て敗れを方便もなく紙に寫畫されし筆柿が早打肩の礙るまでに報られしより辨よりも歎きにも逆上せて東も胸は霹靂に亘く身ならぬ雲に落て往方は定めねども倶ならねば七轉八起べき横難の降て涌る涙の雨に好濡るゝもいそがず亦より追隊莵

も然せバ良へ偖ハ心を鎮めて現小紋二が知る如く財宝の鍵ハ爰にあり。衣物も些ハ惜けれど擔荷ハ走るに不
便なれバ金ハ遂ふに貪出して三が二を我身に纏ひて其餘ハ分ちて取らすべし。小盃共持なバとてひらけて走りて納戸へ
入りけり。小紋二これを目送りて小嘍囉們に悄語き和主們ハいまだ思はずや今の小指ハ（方言に妻を小指といふ）木綿張が投
名状に換て出せし素是風来人なるに頭領が蕩溺くなりしより遂に後妻にせられて奥さまなんど敬へ
ども恩もなく徳もなけれバ這火急の期に臨みて伴ふて遂電せんずる脚貫縁なるらんのを況飽まで慾深くて
有財もこれ二ハ那身の盤纏にせんとておはすの金子も寡きハ知らねども八九人なる中今が一を遁さまし那脚小
倶して走らバ今日茲里ハ免れんや出ても怪も疲労あらん這里に在在那里に穏で竟に追隊に趕逼られて平等不利益
擒捕られん時務を知る男子にあらず這頭に思慮の足らぬのせん後悔臍を噬ともなしとおれて大家感じる額を
こゝち點頭て寔に和主の了簡妙なる然バ小指を結果せて金を奪ふて走人救といふハ小紋二がそを抗て噫聲高し若
亦可も罪も慾も無き婦人を結果ても多ても術ハ亦男にあり耳を寄せねと聲を低めて小指を活して殺さで我せん
なる係かる箇様なと解示もせん大家听て會点して其分別ハよく妙然が如右せと悟りねると諜し合して程なく

長總ハ納戸より財宝嚢を引提て出て来つ小紋二們にうち對ひて人多有りと思ふれども匿し遂もの金銭を今みな身們におく
ちなる金ハ纔に十両許それが方も此ハ得るかしといへバ小紋二膝を找めてそれも他より寡からで千両とも優まし然
らバ遁しまゐらせぬとて長總ハ心もつかず卒とて出ま財宝嚢と共に小紋二に遞さぬ長總の利を合せて操抗れバ吐嗟
なんど呼ぶ程しもあらせず大家咄と寄かゝりて両掖をとり脚を捉て矢庭に結扭る準備の麻索出居の柱へ圏々
巻に繫まして衝ける布嚢懐揣りて引出し裹衣の紐ハ是一百餘両あれを偷蔵て我們ハ只一割の十両金憎し女
流にて似けも無胆の太さよと罵るに小紋二急に推禁め長總に対ひて奥さまよ恨なるな素是我們が悪心ならじ
身を惨くせしにあらず今から女中を伴ひても路果敢もなく狭危を倶に免るべしかるの非除なる身を残し置とも素是
女流のおなれバ其罪我們と同じからず左にも右にも罪解で大赦の折に遇あるべし是に就て小嘍囉們件の一百十餘
金を這人別に配分して各二両餘あるを辛苦銭にと小紋二に加て遞与して犢鼻褌へ各結着る間も心惴
ゆ逃支度誰も彼ねど後さへなる背門より立出て外視ればハ群鳥の君に聒て後に倣り先に鳴子共音に
たに胸を冷して走りけり余程に長總ハ眉に火の移く急難に搗て加えて小紋二們に鈍も甘くも謀られて腹立し

有像第四十九
今之根とたつ谷ふ入谷山の
就盛千劍破捕殘盜
みとりのそ手あとものとき

に身をぞ焼く。檜柱に結扭索のもの見ども手も動さず枷も羈もあらぬへおろ堪がたさといへバ忘出も堪ざる紅涙。落て流れて狂ふるうち駒と猿と鐖かゝる恨を憐れむ人もあらねバ身ひとつを千々にぞ摧く胸のうち祈る甲斐なき神の加護佛の利益絶果て今ハ命も絶なん魂緒を脆くもがなと思ふ嗔恚煩悩愚痴妄想身より出る錆ならバヨヌ山の礪をも磨くべき天羅の中に在ながら罪も報ひも悟られバ解しも亦黒髪の乱苦しく罔上げし氣さへ労れて憫然と時の移るも知ざりけり浩処外面に人馬の足音猛可にきこえて推寄来る緝捕の大将ハ遊佐河内守就盛ハ五十個の士卒を分ちて村の四方を鈙断せし後五十槍電激隆光が既に両個の伴當をゐて楠正直の河備の宿所へ赴きたるよし間諜者が報しかバ速やかに動きて雁鳥野なる時分を攷へその機を察ひ今ハ好時候なるべしと思へバその隊の士卒に下知して大家ハさらなり隨に快と脱兎の如く瞬間に隆光が宿所に馬を驅着て家の四方を轆々と捕囲せて前後の門より咄と喧きて稱入けるに残盗ハみな逃亡て一家完宍男たるものハ稱偷猫児だも在ることなく五十餘歳とおぼしき女布裏をと縛られて柱に酷く繋れける大家倶にこれを見て他ハ甚麽と左右を問ひもせず下さま先雑兵を外に出して主将に報しかバ就盛も亦許ける

から馬を庭門より騎入れて坐席の縁頭まで找ゆく件の女を過に見て隊兵們に下知するに隆光が残黨ハ既に逃亡たりとても隊出路を塞せたれバ漏さまじ叱せ手ばやく那女の縛を解しかなたハ他所のものと見えざるに傷ふな折ふな稠にあつくと細め下知ハ故なからぬ快を索を解棄て我馬前に牽坐らるに大家阿と応て走の鬼の如く長總が綁縛の索布裏をするく解て被立する面を見るに左右より秩と捉て縁頬よりうち下しを推跪ける登時遊佐就盛鞍をよく縁頬に登見を建さ尻うち掛て長總に佗よりち對ひて女子もれ汝ハ是隆光が妻なるべき残黨の名あて何処を投て逃亡るや汝ハ亦いかなる故あらりて木像の如くに結扭られする吉家辞を招しよ倘宣なべきにまを頼り陳ずべ鞭撻笞へしてふゝせん宣快に禀せよ甚麽ぞやと警めて向る長總ハなか頭を擡げても亦今は耻の顔にかゝる乱髪を左右へ攪据て沈吟つゝ答るやう奴家ハ素より隆光が妻にあらず由縁あり最前ハ克める這身ハ素生聞食ぬ容か奴家が良人ハ世に知れたる鎌倉管領家の御内人藤白隼人正安同に完候るはずも及ばせぬ日ん安同ハ去歳の四月親姑峯山島の底倉にて助則とかいふ件の為に撃れけるが不覚のおん死にて各賊立去剃宅眷を追放せられて奴家ハ獨忠義の老黨衿笹葉甲とかいふものに扶救れ今ぞ由

群玉堂印發

縁と心ゆき京師のくに赴く程に遠江なる小夜中山の頭を疑似の横難起と憐むべし秋葉山まなる恩人の為に命を
須し奴家も俱に誣られて村長の家に捕籠られ今幾日の春もを在りけるに料らず其頭の破落戸赤猪張荷三郎と
唆做しなが村長を誘ひ遂に奴家と救命を俱に這河内に走る隆光の隊に屬に及び奴家を妻妾と俾
ア其隆光に恩ゆ一ども我身何ぞ操を破りて人の妻妾となるべきと死を極めて従ざりしを然りとて赤猪張荷三郎と
を殺しを責使ひて其月屬を經ずして奴家に始より那隆光を強人の頭領と夢にも知らず荷三郎に
東路に名高る騙賊猾長を人を殺害を越る最初より近に知らず在りしに夜叉隆
て光父子が支黨を感従て八九の荘院に夜偷に入りしに隆光が獨子なる雷九郎隆成を首として宗徒の者下を殿
と捕られ隆光と小嘍囉八九名に痍を負せられ詰豆の折に荷三郎と隆光に従て夜偷の隊を在りしに
あり痍も負を支の紛れに荘院に什物を偷盗を最後に贈り與て密談數刻爰
荷三郎に他も勝て奸智に長る強人なりし奴家を初く他知
ア其浅ましきを偽を偽虚を恁てあるべき身も連係の崇りに遇へ悄を地に守へ是なるべし許嘉に暗

かに思を知るべきなりと呉ぐりに有ねどそる亦婦女の悲しきに耐助る人を為さるべし數年の後に隆光を
荷三郎が薦めに奸計を従ひ今朝に河備の楠殿へ密訴のあるを聞て那八の荘院の什物を奪へる荷三
郎に筆柿の紋と小嘍囉を若黨奴隷に打扮に俱に河備に赴く折倘奴家が脱れて首許を
と埋を食て布嚢を衛に柱に敷く數年を留守を委ね小嘍囉に好ち成れ情を破けを吩咐て
生て出たるに約莫一晌經を歴るに那紋を端々走と河備より帰る留守せ伏家に報る迄者に機
密を猜されに頭領と木綿張に楠殿の第に捕捕に狡獪に正可を為ねに古の変卦の吻に
辛く脱れて還に這里に緝捕を蒐に快に影を躲さと罵に報る驚慌に小嘍囉に紋を申て共に
九人を貶て納戸に走て有財を皆半を九ッに分て合を腰に纏に連立て背に出る乱れ足徒
嬉児の子を散ぎ如く徒方に知ぎる偽然に奴家に殺されもせ無られに没怪の幸を人を喚と呼ぶ聲立
れ奴布嚢に帮助を参と折に相を見に死勢を找めに人のを見に徒に愁訴に折に我に人のを
あげ号一期の欺けに天通目の光り我に人を暗を呼を呼べと惧に有かに造化に為られに虚談実情に難で

其身勝るの似而非訴訟苦し折の智嚢頻り少と機に臨む。要に心当る言巧でも恥を忘れ猿利根但那巴峡三聲の客涙絞るけれども。所詮れも実々考へも轉り少と就盛孰ち雪て原来汝が鎌倉殿の

龍臣なる死と少えなる藤白が妻なりけ狭我なるかれと異へ那本綿張荷三郎が東国より来り浮浪人迄初が五十柱隆光が強人の首領なりと知るも今茲春の比より之その妻と共侶に五十槌が家に寓居る程に隆光が荷三郎が妻長總を奪へ臥房の陪枕に幹さとの知る隆光が罪発覚れが今朝楠が宿所へ力士捕せ原荷三郎が首訴されるその故に箇様々々と隆光が姑麻姫へ誣訴せと謀りて荷三郎が首丁の趣旗なる偽書の事その崖略を解示せ長總なりて駭然と憶へ顔を赧うまて裏く胸を然気なるを宜い事

とるべし神なる身に覚も亮奴家を荷三郎が妻なるどもれ無慙なる誣言で侍るか他が小夜の中山迄その春奴が家を救へ悄々地に這地へ倶と来るその身のとが隆光に贈り与へ侍り之奴家へ然とも知らと初に禀る恩義を感と花実人なるどもるる。鮎に這地に伴れて強人の家に寓れ居れる然が今番荷三郎が心変るる隆光と謀なると諭さるに他が仮価に知るを伝れと荷三郎が姑麻姫と言る什物記録を偷盗り隆光を誘せし。

他に示り又小紋二と嗅做を小嘍囉に姑麻姫と言へが偽筆を造りるも荷三郎が隆光に説薦める好計を伝へんと見るに依りて詐欺多に光槻の本性を査へ那誣言も必ず合さるに狡兵今番便宜とも荷三郎が返忠の告訴に還て空あるを隆光们と共侶に梟首せれが小夜三郎が枉死怨を復さ足んと執念深揣る巧言今色莉剣の苛に茨の刺心に花に似げ事情を知る申もるに就盛連に頷て愁訴の趣理あり是に見合れば那荷三郎に隆光と又十倍の奸賊に異日虚実を拷問と讞断に折へ人先よりの義を為るに詞徐に諭を折り村の四方に埋伏をる五十個の士卒们小紋二を首と七九個の小嘍囉に送り捕て追立ち牽ひて来り皆庭前に椎竪て実検に入れ捕の頭人に捜よ

ア之直に伏る僕们仰と奉り出路々に埋伏せに果と這強人毎が或に拭まて面を草に或に笠を傾げ慌しに走る来るを眼に見る村長们が逸速く遥に見て他们を五十槌電次が武藝の弟子なりと報るに相も漏さじと歩々と捕竜で搦捕んと找む程に這奴们久く駭怒るるに腰刀を引抜て小雲雀時に挑さるけれども勢力これ及ばるも竟に刃と打落と索をかけ。都て九名這们が外に逃せる支黨る

あるべしと毆悩して責問ければ這宅ハ九の荘院ぞ姑磨姫主僕に毆されし残黨ハあと云ふし但這小紋と喚做せし小嘍囉ハ隆光が與に偽書貝せしのみ今朝ハ又隆光が韃奴に打扮て楠殿の第に邁けし隆光が擒捕る折その機を猜し逃去てしを火計の小嘍囉们に報知し倶に後難を免れんと逐電に及びしよし衆口既に異同なければ村長故老们まづ侭召倶しけるを就盛ら安て然ぞおもひ像を我推量に違ずと云く。這里に残盗一人も存ねば柱に惨く綑られる這個婦女のみなりしを其郷縛の索を鮮て鞫問に則他が云所と餘賊の招了る吻合せば若们ハその強人毎を多く城内へ牽もて深く緊しく獄舎に繫ぐべし我も程なく帰城せん。快く立よとハそずせバ頭人ハ兼の如と応て躯て雑兵に知り倶て小紋が们都て九名の小嘍囉を又且恭がに追立さく。城を授て退りける。登時遊佐就盛ハ村長故老们を縁類の下に召寄てみづから云ける這屋主隆光ハ素より強人の頭領ぞ。他が武藝ハ門人多きど喚做ハ威ある文黨ある露顕に及びしハ今朝隆光をバ河備ある楠正真に擒捕らし且残盗ハ知るぞて層所の羊に至とれば這地へ来ぬ異るべしとハ村長額ぞ頭を抬て然ハ那五十槌隆光ハ外より来て偷見あれバ地方の與に穿鑿捕て未然の害を除ぞ義侠の武人と風聲今に哀

後ハ憑しくぞひけし積悪露顕の上ぞ奴ぞ文黨まで名残ぞ猛可に搦捕せらし御武德に皆夢覚て驚ぬ怕ぬぞるもの絶ゑ一人もあけハそとおそろく稟ハ就盛然と頷て又村長们に知まするも若们よく兼れ這賊巣の侭に一日も建措くべきものにあらバ速に破却し餘材ハ貧きものにあたへよ又并首に係る一婦人ハ隆光が餘類に似て実ハ隆光が餘類にあらバ罪なきものなれバ姑且若们に預けん罷るも肉ども勤て召より折倶し参れ通て故老们も村長を相資てよくせよかしと云示せば這那齋一阿と応て舊の処へ退ける徒而遊佐就盛ハ馬を擔下に牽よせて縁類よりうちの乗ればハ庭の左右に処陝ぞまで列を正せし許多の士卒が叱咤の聲と共に侭に身を起して先に立後に跟て徐もて去く残跪居て額つく村長们と倶に目送る長總ハ只就盛の後影を伏拜て又俯なむ笑顔に餘る喜びの鴉もけハ憑しれ人る別れの惜しく後朝をて秋の日も影ハ短く已に過て一ざるぞ残るもの著熟に喘ぐ牛ハあれど午の貝吹く時ろ候らとよ伴れて村長の宿所へとて赴ける噫嘻奇なるかな造化の賞罰緩なれも又公正なるかな猶[illegible]時守どく心清ぞも濁れぞも流て西く水とハ人の往方に譬言ぞ昔の人の詰柄や測り知れぬものなり何処か守[illegible]の神ならん。晴んとしてハ又曇る女子小人の吉凶禍福治に出て治に返る結局応報ならんや看官誰何と止るべし話休題ぞ介程に遊佐

就盛は馬の足掻を早めて、駈て帰城に及ぶ程に、小山岡作就安は、十個の力士と共に河備もなく来て、就盛に報らう。昨夕仰付られたる五十雄隆光を緝捕の事は、力士を帷幕の蔭に躱して、暗號を定めて侍りけるに、今朝五十雄隆光は、那木綿張荷二郎と一個の奴隷を従へて、楠殿の宿所に来ぬるを、湯浅敦義們が迎へて、書院の方に誘引程に、在下透さず力士を薦めて擒捕んとせしに、件のかれは尋常に倍る力量剽悍、前後に當り左右に拄えて、輒く擒ふるに合ずるを、正直は見難てや、短鎗をとりて隆光の脇腹を刺しかば、弱るを大家推累りて擒捕りけるに、正直惴りのまゝ痍を負せしを、生拘るべき是非に及ばずと、人を識りて身の非を飾る、是小人の情態なるを、就盛は却後は甚麼にせんと問ぞ、就安然ば隆光に倶して来る奴隷は、毎く逃亡て、その餘の伴當もあらざれば、緝捕は支果たりければ、隆光は縛て力士們に護らせつゝ、参る程に、正直まで見参の與首ある木綿張荷二郎を廝倶して、在下們に推續て、既に當城に來臨あるべき君の知らせの来まして、これまで就盛へ現状を言し如く、隆光が武藝は然ぞあらん、深痍を負せて擒捕ざれば迸滅の事も我がみて、隆光が手創破り、宿所より向って残偸を一人も漏さず、珠數繋にして牽て來者先正直に對面せんと、且客房に赴けば、就安も従ひて、ます身邊に侍りける。當下就盛は正直に對ひて緝捕の一義を労ふ及ぞ。正直も亦強盗對治の鋭どく、鋒て候ふ。那隆光は強敵也。許多の力士を物ともせず、透もあらば脱れ去るべき勢ひ制めがたかりければ、已ことを得ず鎗を錨て搦捕せしのみ。手足よりて隆光が竊持なる姑麿姫の偽書、錦の御旗、菊水の旗、その餘那家の古記録あり。一箇の皮匣に納る随私に提も措ず、那荷二郎をも召倶したり。守護の理會に任せんと欲ぞ。件の偽書もあくにありとしき、皮匣の蓋を開きて出すを、就盛は受合手で、曲くに這那とを、熟視りて冷笑ひて、怯ひで無礼なれども、微禄の和殿ならず、那隆光が死物狂ひを、強敵でとも必ずるべし、那折助刀せられず、痍を負せずして搦捕んは今に於ては是非に及ぶまじ。唯們は九個の残偸み、兜毛だらのも痍を負ずして、皆悉搦捕りぬれど、外に一個の婦人あり。ムが招了のよし聞しに存なり。隆光が餘類にて、実は隆光が餘類にも非ず。荷二郎が密訴の、鵺鬼ヨネの敵なれば、虚実分明ならん。又這度皮匣の贓物は、姑麿姫の什物とあるよし、京都へ申あげて、下知に依らざれば、私に返しがたし。下官が預り措ん。是等は寄人の急務ぞあれば、隆光并に支黨を牽出させて、拷問せん、和殿も出席あるべしと、宜に正直異議もなく、然るべしと答る間に、就盛は小山就安をもて、怯を入吩咐れば、就安聴て下知を傳へつゝ、同法所に有司を聚合、生拘の強人們并に木綿張荷二郎を局の内へ召入れて、准備速に整ひけり。登時遊佐就盛は楠正直と共侶に同法所に出席して、上坐に着

けれども傍ら正直在り有司共ふ就安仁の縁類ふ罷れて先隆光を霍乱病ふ
堪ず死しるを首級を実検ふ給ふ次ふ小紋二仁九個の小嘍囉及量裏ふ九の荘院を生拘られる痍員の賊徒二名を
も皆悉く牽坐させて緊く拷問ふ及び一ふ小紋二仁の苦痛ふ堪ず隆光が去る年来夜偸の為と自ら為る夜荷二
郎ガ九の荘院を偸盗する什物を姑麿姫逆謀あるを誣訴し奴を子隆成仁ガ與ふ怨を復さんと欲せ
ば足荷二郎ガ計較を隆光ふ薦めり又長総ハ鎌倉武士の鬼妻を落魂ちけるを荷二郎ガ倶して来し隆
光ふ贈りしまでアリしを吟味するを漏さず招ずして其ガ就安又下知を受て隔昨の夜其九の荘院を毀れる支
るの くび 首級を小紋二仁ふ見せその姓名を問ひガ隆成并ふ奇山拳五鼠坊ハ疑頭之振平会珠八食介を它の賊の
党の姓名を詳ふ知れり就盛れをもち空を偽れ這小紋二仁者ハ一言の小嘍囉もその罪隆光と異なる快牽如
き斬で棄よ隆光隆成宗徒の賊の首級ふ牌ふ姓名を識し附け申明亭ふ梟竿で好民を懲べ
ちるよと厳ふ命ずれば就安唯々と言来て小紋二仁の小嘍囉を咸雑兵ふ牽退しその身も躯て推續く
その外面ふ出ふ当下有司聲言恩ふ首人木綿張荷二郎ガ捉やと喚けり小程ふ荷二郎ハ扣て局の入口ふ

在の者の間遠ふ居れば小紋二仁ガ招ずの趣ハ皆ふ知れども今番の恩賞ふ隆光ガ世帯二式と賜ふ長総を夫
婦ふ為べ下れる倍て時運ふ稱ず京都将軍の御内人ふ做登ん知ふ及ばと兵ハ隆光ふ投られる撲傷を
いまだ愈れども意氣揚を歩も捉て雑兵二名ふ引れる縁類の頭ふ参り就盛躯て推跪ませ伝と疾視を
ふ荷二郎汝ハ東国の浪人を隆光ガ家ふ寓居ふ及ども他ふ強人を知ふ剰ず房長総を隆光ふ奪ず殺れ
ふ御国這個榜殿ふ密訴をするふ及ばやと問れ荷二郎然ハ既ふ知せ奴ふ詳ふ事ふ及ばず小可初ハ隆光
強盗を知ず他ふ盲夜九の荘院を支黨を殺れ奴ふ及ば身ふ連
係の禍を怕れて密訴仕ふ且長総ハ小可ガ姑麿の妻を落魂し隆光を奪れ西眼離別の愁ふ堪ず這那隆光
我身の仇地方の毒蟲害公私両を餌を食ふ為ふ及ば奴ふ及ば
二郎大胆無敵我ハ知ず思ふ狡汝ハ原是東国を騙し騙賊
妻長総ガ冤屈の罪ふ内れ助ふ倶て投名状ふ換んを隆光ふ與へ奴ふ長総及小紋二仁ガ招ずふ
紛れ無ば況ハ九の荘院を姑麿姫の家の什物を偸盗し奴ふ所為を姑麿姫と誣て隆光を映誘

を那偽書を造らなるも亦是沒所為多ふ選て隆光が積悪を密訴をるに平表半裏をを忠生とといふ狡猾倘
飽まで懲ふ懲ふ公ふて実を吐ず兵毎とあく荷三郎が笑を中よと焦燥を別て始ふ雑兵們が兼を西方を度
蔓の荷三郎ふ舞々と素て撫て平蟷の如く推倒し長胥ふ赤樫の棹ふ藤葛と巻着ふ切ふ撃を
かけて背を二百扱て肉破れ骨見れて鮮血ハ滾々と流れる痛楚を堪ふ
ゆるして饒させを招を下寨上人と叫ぶ迄雑兵們ハ然もそ
推坐け登時荷三郎を踞ふ跪て就盛ふ宣ふ賢将上ふ
欲しる罪と知れ既ふ知を如く是まで陳まるハ皆悉搗皇ふ小可ハ東国を年来掠て騙扇をふ
五十槌隊ふ欲て近蠣這地ふ来れども投ふ伏ふ易ふれば俱しる長總と贈ふ隆光ふ贈
素ふの情願ふ他を推倒ふ長總と香餌ふ隆光ふ心を宣ふ他を
夜隆光ふ子隆成ふ意貫ふ儘て八九の荘院ふ夜偷ふ入ふ隆成を首と七支黨ふ数を捕らを
勝隆光ハ浅痍を負て残黨十名ふ逃ふ悔れば他ふ衰運の時を過て悔々地ふ謀を自屬ふ反意を

遂ん者ふ図ふ逆ふ図ふ明を鏡ふ似る御憲断灼然ふ罪を免る所ふ勿論小可も那夜安隆光ふ従
ふ八九の荘院の墻を乗て潜び入ふ闘戦ふ手ふ只那皮匣を偷ふ故ふ痍も負ふ宅ふ
係を送ふ招て者を就盛ふ冷笑て汝ふ悪を文ふ
頭ふ情由ふ甚麽を問れて荷三郎ふ色ふ御詫ふ小可年来東国を人ふ女児を拐ふ或ハ旅客を
騙扇ふ懸て奪ふ者ふ售ふ者ふ好人を殺ふ
婦ふ悪人を約銭ふ囚徒ふ罪ふ責殺ふ
四光村ふ好夫淫婦ふ松飯梅ふ前夫皺を悔々地ふ害ふ
殺ふ又五十槌電次隆光ふ幾内ふ平ふ大盗を幾番と
人ふ可密訴ふ就盛ふ笑て
理ふ似て汝ふ是善人狭抑亦悪人狭ふ問ふ分明ふ
時遊佐就盛ふ又呵々と笑て貪ふ利ふ賢ふ人ふ難義を

做て樂むりの人を害する賢とて已に返さんを知る是を名つけて殘忍と荷三郎汝人を識る殘忍心とられる

○其の身の殘忍なるを知る○その罪を免れ隆光も勝らべ他も決て安堵し宜く共に島原の世忠を慶ぶべし

これぞ隆光と密計の一條榮利の與なせしるまぐ人に對しまるその功を見よあら忌れば姑且首を讀け措て放免ふ

做て死の命を無利家の御武德四海に滿て今風波立ども然とも反逆の徒を亡ぶべし世間楠正成へ

渡く男を養て寄を欺死を免れ世間碑に傳へ話柄とを汝が如邪智と長る心虎狼に似れも放免と

做て世の死人を涉獵ら必その功あるを見ども放に城の出入を饒し者遂て他郷走るを折の與れ額三の

字の命を刺し標を立べ他郷へ出ることを饒ども慈悲を汝命を惜ば心を定め答を言せとられて荷三郎怡悅ふ

勝を滿面枯樹に花さく如く頭を拾げ又額つ死てを有る見慈悲を賞賜の二の字に不足百萬

字での金印に厭く御諚に從ひ天人の眼と做て後々まで御恩を忘れ難と云ふ就盛顧て云ふ

赦さば答瘡の創るまで姑且獄舍に數年間兵毎其荷三郎を牽退け楠主下官が讞斷に右の如有

司們もの意を聞く記錄に筆を行ふ云ふ大家斉一賞讃とある日の廳に果けり。

第三十六回

満家二人び密策を旋らす

楠女前より得失を知る

却説遊佐就盛に楠正直と兵倡に向注所を退き猛可に一席の酒宴を設け

正直に盃を厮薦め今番衆賊伏誅の喜びを表せば正直に盃の官待を感謝

注進に亦在下も使者を管領家へ遣せて姪女姑娘姫が勇戰の趣を啓達

満家主に賜る采地を下官に這年来畠山家の麾下に從恩顧のめでいへば

權に守護に補せられるの実に那家の眼代それ好も乎も老侯満家の處分に依らぎと

人各職分あり貴方のもを注進の指揮に及びかぐり況五十槌隆光們が強盜

摩玉堂印發

入るるの歎覚へ。御邊の姪女の勇戰と那荷二郎が貴所を憑みて密訴きる所以なるか。下官何等の功あるんも然るを決断速なと。賞せらるる分か過うたか左まれ若もれ翌朱明か使を立て京師へ注進せんとの。另か仔細もなきんと。いとうれもく答る人の心の測へ。加てや正直へ沈吟して。まるんの在下も豈同時刻か使を立て管領家へ注進あげて思ひみ。豈もん歎待かたき黄昏か及びて異日又拙宅か喜の席を開きて光臨を請まるんその折餘談を罄さんと疲労もあるべ。身の暇をあるべ。と叮寧か別を告て却伴當を聚合へ。河備の宿所へ還りけるの折か就盛か正直か徒々と答るか表裏か也既か注進の准備あり。向注所を退り一折隊満家より隷られ。當城の加番なる誉田舅九郎と喚做さる。一個の壮佼の口才あて騎馬の達者なか一封の注進状と姑麿姫の什物を齎へ。京師へ遣れ。舅九郎か昏夜を分ず連りか汗馬を鞭を鳴らして只管路次を急程か次の日の曉天か管領畠山満家の第へ一騎来着きと。注進きりけ。然れ楠正直を

就盛か出抜れて。恁るべしと思ひもかけず老黨湯浅敦義を使者として次の日の朝未明か。京師へと遣し。姑麿姫主僕の武男の事并か荷二郎か首許の顛末強盗五十槌隆光ら。伏誅の点の趣一事も漏さず箇條を立て。亦是管領満家へ具か注進きれる就盛の使。既に一日の遅速か。満家れ詐りて正直か姑麿姫の後見であるを等閑か。注進遅滞奇怪との義既か就盛より使を以注進きれ。言上か及びるを今満家提成。亦忘慢か必饒きるべ。弥以姑麿姫の進止か無異の御沙汰か及びれとの後も亦忘慢か心を屬て注進疎略あるべと思ふの隨か叱り懲し。敦義を戒へ。正直れを傳聞て驚怕き大かるべ。原来就盛壮年。我注進を遅くせんと。那日猛か酒宴を設て出抜るゆゑもんぞ。我れ素より毫だにも上か對へ奉るを不忠不義の心。且姑麿姫か姪れとも。その志異れば他雙敵の思ひを做さか忠義か易るもんやと。就盛へも思ひ介意せるるの多ど。今より人か捉れる志を見ざる朋輩か心なく猶且上のん疑ひを解り竟か多るべ。と悄々地か

満家閑室與好黨小集

有像第五十

思ひ定めけるなるべし。後の話ハ介程に管領畠山満家ハ次の日営中に出仕して就盛が注進を自餘の管領斯波義教細川満元にも通達して三管領評議の上にて室町殿義持公にまうされしかバ義持公ハ就盛が火速の注進を誉させ給ひて且姑摩姫が勍勇智略今番の一條のミならず竟に國家の患とならんも測りがたし。その義ハ満家奉りて今に正直朝に下知を傳へて遽く非常に備ふべしと仰渡されけり。是により満家ハ宿所に退る程に肚裏に思ふやう上の賢査宜なるに以あり。姑摩姫が謀反の事ハ那荷二郎といふ一人の猛可に思ひ起しける詐計なりといへども錦の御旗ハ家の旗なり今も猶秘措がバ逆謀なりといふべからず。左なく計策を旋らして虚実を探るに優ことあらじと既に尋思をもしつゝ遽く宿所に還りて二男左馬介持永に懇々と意表を示して腹心の毎を招き聚合よとて命じける。這満家が嫡男ハ左衛門督持國ハ性公平にして行状宜かりければ後に亦父に嗣ぎて管領職に補せられけり又二男持永ハ色を好ミ酒を嗜ミて兄持國と同じからず。

俊雅あるひハ俊泰に作りて阿坂城主とし又俊雅の父の木造の城主とし俊泰俊雅共に満泰の弟とし二人共二人共ハ未詳なり其をもて見一人を二人とし只伝る所同じからざるのミ

残忍無頼の後生なれども只是季子の子なるをもて満家只管愛に溺れて果敢々々しく教訓を加へず。その故に持永ハ欲するまゝに人との好ミも万も聴れしかバその兄を兄ともおもはず。屢忌憚らで己が随意に挙動ひける。又北畠俊雅ハ伊勢の國司北畠満泰の弟なれどもその忽劣満泰とおなじからず。その身の居城領分共に伊勢の木造にありしかバ南北両朝御合體の比よりならで足利氏に佞媚て本貫ありとすなハちまた京師に在りて仕へしかバ則武家の吹挙によりて左中将になされけり。是よりして俊雅ハ三管領の内中に時めき栄て第一の權臣なる畠山満家に縁を求め相親ミて馬前の塵を拂ひしかバ満家ハ親愛せられて日として往来せざることなし。又這時節洛外北嵒倉に齊天行者豪袁と喚做る一個の修驗者ありけり。役の行者の流を汲て神を駈り鬼を使ふ神変奇特の法術ありとて京師の愚俗羣聚して病痾を禱り物怪を禳ふにその效驗灼然なりし風聲紛れなりしかバ満家これを傳聞て悄々地によびよしもあれバ那豪袁を請待してその法驗を試ミしより敬信の心弥増ければ間なく時

を招ぎ寄せて商量敵はざること、大事は必豪袁が石山を問ひもせざりしに後に行ひ
ぬ。話除繁却説左馬介持水は這日使を走らし北畠俊雅と齊天行者豪袁を
猛可に招き寄せるが那樂田響九郎も淹留して在りけれども閑談の席に侍らし先俊雅
と豪袁が不孟を薦めけり。姑且して満家へ徐に奥より出でて船で囲坐に入りしが俊雅も豪
袁も遠く席を譲りて安否を問ひ互に異を祝し俱に浅からぬ東備の欽びを舒べたるに満
家も亦速に二客の来臨を喜びかつ不孟を繞る程に件の僧俗に對ぬ二位の
賓客に今番河内の珠説ありしの注進に詣登りし則這個の郎は他へ愚老が
家隷なれば曩に河内へ遣はせし遊佐河内守の隊に屬する響田樂九郎即是は那珠説の
這郎が首より具に知るべきに語せて聴かんとのこと俊雅豪袁は今宵天象の額を見て奥の
ぶのかを伺れかを誓田生に折るに初て御意を汲むべきを這方へ
近く找るべきを欲るかと申しひとく促せば樂九郎も亦見参の欽びを述べて五十槌電次

隆光が伏誅の克の顛末及姑麿が姫の先見武言男が首を尾を克詳に解示せば俊雅特に
感歎して云云と問へば満家急に推禁めて各位をけの招き入即ちの義に依りて那五十
槌隆光長の知れる草賊を縦那俊ありしも腹心の患に成るべき況の残盗を逃がし誅
戮されば河内を無異に似れども只快らぬ那姑麿が姫のことか。他に素より幻術ありて正義の
亦兵庫にまでなりし隆光が夜偷をなく猜査に驚捕しなるべし。然る癖者を我封内に
忍諸に在せば竟に腹心の患を免れ曩に這義を忍びて悄々地に上に薦めるを小倉殿
後亀山天皇の恩賜と偽り二千金を取せし是強盗の名を藉て結果に與りしを我計る所違ぞ
志隆光が夜偷ありしとは雖も似ず強盗仇に驚果れて姑麿が姫の恙を怨まれ
よりて愚安を旋らし那荷二郎とは強人が隆光を首訴の與に薦を偽書を造りし姑麿
姫が逆謀あるを正直に救ひしを只隆光を間るべき詭計とは今亦深く思慮れば
実に那姑麿が姫が逆謀あるを知るべきぞの虚実を探んに愚老一箇の籌策あり今番受禅の

御沙汰に就て伊勢の国司に愁訴の筋あり。事情を原るに南北両朝御和親の折、持明院殿大覚寺殿昔の如く迭代に大位に即きたまふべしと亭一定なりしに鹿苑院相国の只管一時の御權策にて御本意にあらざれば當将軍義持の御遺訓に儘てその議を用ひざるに故に満泰の愁訴空しくして悄々地に鑌を磨ぐその風聲聚まりて因て河内の八九村へ假使を遣して一個へ則小倉宮の御使俳り唱へ一個へ則北畠満泰の使と名乗て箇様々々の事を姑麿姫漫に欺き信てその逆謀に一味せしめ折に付て誘へり。謀反の證据を合せて征伐に是名あり。よって柳営の義持あげて世に伊勢の北畠へ討手を向けらるゝと披露して急に河内へ人馬を找めて就盛に謀に合せ姑麿姫が八九の荘院を挾て捕稠く息を吹き攻討べ姑麿姫五道の徐を辿て武勇相馬の将門に優れたりとも脱るゝ能はざる勢ひ其首に窮して伏誅せしと疑ひ、人を遣はして支行れざるを遂に那奴に笑ひ下の議へ什麿と悄めたる閑談濃やかにて持永を首とし鷲九郎仏に至るまで嘻奇多き妙と齊一感歎きたる當下俊雅沈吟

ナ造とは伊勢ではコツクリと唱へ相通ずれ共キツクリとあるべし氏姓と傍記地名はコツクリとも云ふ共紛れ易し

もの現御主人の遠慮の如く姑麿姫四相を悟る才ありと必ずるに倘その使ひ人を得ざる作者の脚色は巧みにて故を做て所の俳優の拙きに劣らせし世に故郷を詐る人もヨクヨクその方言の違ふを知らるゝ。兄満泰の假使は究竟の人にて這個別人多くは満泰が老黨多く木造内匠親政が愛子にて木造木工が泰勝と喚做すもの即是に抑件の泰勝は近曽五柳村の浮浪人稲城某甲とかの罵れる恨みあり因て泰勝の若黨が主の怨を復さんとて有一月稲城を遠箭に射て殺りし支度覚えて那若黨は刑せられ泰勝も這越度にて伊勢を追放せられ。不る泰勝が父親政は素木造の荘官なりしが其の女兒は満泰が側室にて寵遇れ内外に就て依怙贔屓引板屋の方と稱たり。こはかねて親政の漸々に登用せられて今はヨヌ氣に二三を手に權臣に為りて是なるの舊縁なる故に咱仏弟兄不和なるに親政は姑麿に折々に消息して那地の豊凶得失を報る来り好み因て比の子泰勝を寄せ悄々地に潜れ来る其の亦その義を感じて辞せるに忍びず

東京博文堂印刷

泰勝を舎藏して日屬蜀を歴す。然ば他を我兄の假使に用ひなば伊勢ハ則舊里にて方言に紛れもあらじ又姑摩姫に那地なるよしを問るとても案内知れバ答に礙滞なかるべし。非除姑摩姫。四相を悟る才ありとても実事と敗きえて疑ひなし。只今満家笑げに讖番と聚點頭て宜なる哉さて復とぢ人にそれ〃異その泰勝を偏に這方へ賜るべし。計策を解示して必機密の用ひて侍れバ先伊勢の國司の假使ハそが求しかども小倉宮の使とせば必その人をまげざるを却誰なるとも案じに小雲時頭を傾れバ豪袁ハ含笑ながら満家にむかひ對ひて老侯その義なら這那と御心を勞し給ひそ小倉宮の假使ハ拙僧なりて誰か做しぬべき愍ながら烏許がましく自肩に似て延へども拙僧ハ讖番と等く吉野大峯に登山なれバ那地の花の遲き速き孰なる峰孰なる谷の高き深きを詳に諳記せざるところなし。且拙僧が生國ハ大和なれバ方言に疑るべきふしもあらじ。縦姑摩姫幻術ありて居ながらにして萬里の外まで明々地に知るとも。拙僧必厭勝の神術をもて他が眼を瞞えてしまひ易かり易最に那妙子が柳営に潜び入りし折大德寺の沙弥宗純が法力をもて捕竃し

世にありしものも候れども拙僧ハこれを実事と思ず譬ば菩薩の再誕にて其の母の胎内より佛法修行なりとも乳臭耗ざる青道心が何事をかよくせん那折に姑摩姫が幻術折せ捕れし室町殿の御威光に敵しかたきよりもこれを例にまた拙僧を憑忍しく思れなば遺恨のそのかにいれんと鼻蠢かして説誇れバ満家いよく欽びて老師なら法駕を枉げ河内へ赴きたまひなば我計策成就せん木造殿俊雅を翌の夜分那泰勝をかこて申以後ハ當家に留置て那地の進退その日の応答那這となく示談て事情をしらさるべし。鶚九郎ハ快河内へかへりて就盛に是等の秘計を傳へてその餘の人なく洩して宜に珎重々々と祝して更に盃を合し抗て又薦れバ俊雅も豪袁も仰うけたりおなじく那里のものハ我们に任用しあなと答ら謝しぬ江湖上の説話に移る花丹楓色になりぬる半酔児の高笑ひする口軽く眼花も既に泥解ても心へとまれ下司なるぬ六交りハ入らるるも持永ハ特更に酒ものハ王の觴の當なしとらふ高量なれども有數なる親に憚りて辭寡く品ヨヌき酒菜を小碟に食分る酎章魚の脚も洩さまぬど膝ハ崩さで行儀よく饌配して管待けり。恁而北畠俊雅も

次の日の黄昏に木造泰勝を偷ふ倶七又満家の宿所に来れば満家歎び出迎て二男持永と共侶に泰勝に對面七密談數刻に及びけり。されども那八九村の形勢を思惟るに姑麿姫に隆光が詐訴の夏の趣を傳ゆくともあるべ。然ば萬事に小心七ゆゑ貼むるもあらべ。軈て計畧に乗ぜらるべき少許時を過七他の事多く怠る比に件の使を遣ものし。御受禅のあん沙汰も明年と定れば重陽の節供欲遅くも中氣まで宜からんと衆議既に決りけり。是より七泰勝に持永の陪堂にあると共酒席に侍り又或時を囲碁雙陸の敵にもせらるる日とも多し。夢も這那同庚の後生であれば色を好む酒を嗜む同氣に必相求同病必相憐む。浮世の人の沿習ふれば早晩に狎親く只虚々と日を弥る貴介の快樂限りなければ泰勝に俊雅に舎藏れより十倍七最憑く思ひけり。案下某生再説是より先に姑麿姫に夜偷の衆賊を殺散るあの日の黄昏に隅屋安次が遊佐の城より正直を送り果てかの来ん那里の首尾を敷ふるも昨夜より主従夏ヨヌく奴婢們も酷く疲労れ暫く暇を取せて各臥房に入りにける。

その詰朝垣衣に書齋の塵を撥ふ帚ふと心ともなく那齊壇の戸帳を高く掲起てゐる。秘藏の箱の蓋の一ツ開ゆゑ什麿とも驚きて走り寄て安次に告知られば安次も亦訝りて倶書齋に来てゐるに寔に那箱に蓋ありけり。登時安次沈吟七憶ふに那箱の亡るに昨夜の賊の所為なるべ。只ふ偷児のありもせぬ左もあれ快姫上のようを禀上んとて倶に姑麿姫の身邊に詣まるに那齊壇の箱紛失の趣を告ぬ。昨夜に知せずして稠く衆賊を前後の門に防禁られ遂に書齋に潜入る遑あらん。余るに御箱の亡るに疑ふ所なし。倶那折の熱鬧に紛れて偷竊に入りて別人を狩御文房の東西に探ぶ金銀珠玉を鏤めうも然まで愛惜むべきに是に御家の重宝に神と齊まる御旗をも樹を伐草を芟拂ひて食復さべ已かり奴婢に農僕們まで遣て穿鑿ふべと向ふ苦に後生の惴る甲斐なき世の常言に偷児去て縄を糾ふ後悔の外なりを憂ひ垣衣も亦云云と陪話ふ。恁りけれども姑麿姫に驚きる氣色なく恁と少果て復一郎に疑ひを據ふ

あらねども亡物は七番索ねて後に人を疑へと昔の人のいへるにあらずや。在昔宋に父老あり。その家の墻破れたり。隣舎の主人これを見て速に修復せずば必盗児入らんといひけり。またその父老の子もおなじくすゝめてやゝ墻を繕はず。必盗児入らんといひし、その夜盗児入りて愛する斧を窃て去り。その登時父老は驚き悔て、その子を先見ありと誉め、隣舎の主人を疑ひければ、心を属て他をうかゞふに造次顛沛行住坐臥皆是件の隣舎の主人が偸しとく見えぬ事なし。これにより意は決せんとて官府に訟んと欲せし折から、その斧を窃し盗児搦捕れて招了紛れなかりしかば、斧を父老に返されけり。爾後父老は心を属て隣舎の主人を又よく見るに、造次顛沛行住坐臥初めは似ざる隣舎の主人は窃ねずとくに見えずとなん。その文列子に具なり。復一个の疑ひも那斧を亡ひし宋の父老に似たりといふまし。前門に虎を防ぎ後門より狼を進むといふ古語は優て前後の門に虎狼を防ぎしかば衛ぎまゝれども、その虚に乗りて穴を穿ち鼠輩とのべらるものは先々といへども星眼を閉黙禱を凝らし七袖の内より卜ふて速に考ふるに點頭き復一よ、垣衣も然なり心を労もべからず。這盗賊は外人にあらず。又是昨夜の一伙なれども。

去既に我家の什物は他なる人に遮られしを、性急に求めて倒に合復しからんより捨措ば月を歴て他より咱に返さるゝ事あらん。小雲時度外に閣ねとのよしに、安次垣衣は共侶に欲びて、それ憑しき兆なれ。何まで神々しき姫上の仰に下筮ありけり。安心仕りぬと応へて、心の中に歓ぶ程なり。當下姑摩姫は又這男女ふたりに対ひて、儞二人の老実なる、世の仇をも我身に任せ心盡して実なるも、その身の護りとなるべし。只命も有ければ、及ぶ死難の折、争何か因て授る神草あり。あれを我師の賜ひて活人草と喚做す。世界に得がたき妙薬なりとて、肌膚に附たる護身嚢を解き開きて取出す三茎の枯草をうち戴きて、復垣衣よ聴ね。這活人草の奇特ある時疫卒中、金瘡中毒、萬の急症には一度是を服すれば矢石にも傷られず、水火にも死することなし。その病痾寛なるは水にて煎じて用ふべし。倘急なるは推捨て粉にして面に吹掛れば、速に死を起し生に回す神効あり。他人は知らず我身に用ひて死を免れし効あり。室町の獄舎の内に繫れたる折のその効に因て今ちと這二茎を儞達に取らせん。只今あたふる一茎の半分を水にて服用して残る半分を秘措ば後に又

人の死を救ふたのみ少なく等閑なるべきと訓じ遁与を活人草と安次と垣衣に恭く受戴き。恩を拜し共侶に退くと件の神草と半分腹に残れるを護身囊に藏めけり。是より一両日を経て。安次が外に出て還りて姑摩姫に報ずるを小可昨日人の噂に聞くものの比べを詳に知んと與に河備殿正直へ推参し那殿の老嫗湯淺風爐に。件のことを問ひ問ひ風聲果して虚談なるの所以を固様々と問ふ夜の賊の頭領に千剣破村の郷士と覚えたる五十槌隆光と云ふ。その麾下の賊荷三郎が正直へ首訴せしより。隆光并に小嘍羅を遣して搦捕られ申明亭に梟首せられぬ。又姑摩姫の家の什物錦の御旗菊水の旗を。那荷三郎が側合なりしを遊佐就盛が云云と正直に説示し。軈て京師へ登せられ一五一十を聞き及ぶに報知せるに半晌許支皆意表に出でる。垣衣を側聞して連りに駭き嘆けり。當下安次又の曰く。元ト是の神秘なる那を旗に隆光の麾下の賊が偷みしを遊佐主の手に入りて室町殿へ奏上せんと。初に弥増て快哉なるに且那五十槌電次隆光を

義侠の武人と。ぞ。名と。その所為とを表裏して墻を踰隙を鑽る盗賊の頭領を。這頭に知るるのみ。姫上の御武功に遂に賊迹発覚れて。三四十名数を盡して輒く梟首せられぬ。姫上の御武功をよりて。を勸賞の沙汰ありて。盗賊の窩合なりしに當家の重宝と知りながら返しなせば。仍室町殿へ奏せるに就盛主の計ひにて。得がたい哉と。敦圉暴く。怨まるを姑摩姫と。推禁せ復一然のを腹を立て那紫朱を奪ひ鄭聲に雅楽を乱し。碔砆に石の王に似る。駑牛の子の羊に似るを。忍ざるのみ稀に然ば奸臣の賢者に似る。和漢今昔珎かるべし。只那隆光のみ且錦の御旗菊水の旗にも曾祖贈三位中将殿正成より。四世我家の重宝に遊佐が京師へ贈るを足利家に用ゐ東西に然ば嘲に諭せ如。を只今に千萬金に易るとも復りかり。我に他に求ぜども時至らば返るとあん。姑且度外に措かんと慰められて安次に又のたまふ。左右する程に捌月に過て重陽の

節供ありけり。その朝姑摩姫は垣衣と呂ての玉珠院へ参詣と両奠の御墓へ。菊の花を向まうんと豫ねて思ひ寄りけり。折から殊に珠客あべたの兆祥見れるは我身在ての不便なれば因て我身の名代は安次をとなれども。他も亦其頭の儲は倶に存ぜざる提撰の若黨を爭何へせん。然べ仏を遣さるべ。世の人は年は五番の節供とて誰も祝へども我身なりの人並に言時べ。とりもなく切ての親の墓へ時節の東西をまもるとなりて節供毎は寺参りなるべ。然べも亦早かり。身装とも他を將て御寺詣を憑むべ。とりあ垣衣額とりなるべ。もん馴深き深きは賤妾を譜第の御家謀と為るべ思召べ。然る御用者兼統いと有かるべ。厚きもん使は為る恩を稟る縫殿夫婦。維盈とやんべ墓をも。掻帯は花を向べ。智圓禪尼の御安否を便りよれべ訪ねるべ。とりあ姑摩姫領きべ。勿論のべか。智正尼公維盈縫殿は墓を送べ菊を向べ。女宗は御寺へ立寄て住持の尼前は云云と伝へべ。憩べかり本よ仏は相識る中べ秋るゆべわんぎんとりあ垣衣をも

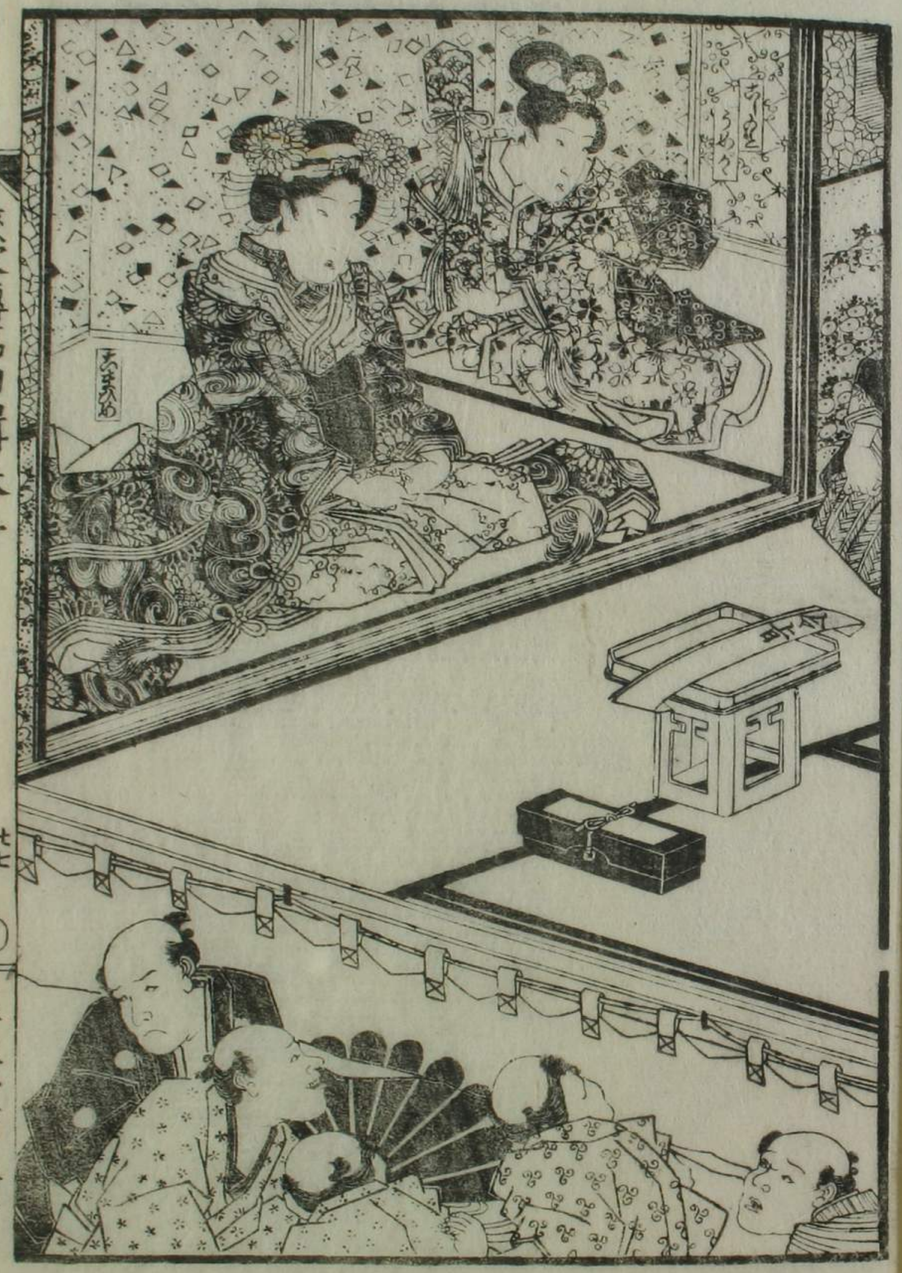
得果べ退べ結髪化粧べ身装を做べ程は秋の月べ短べ。既は亭午はべ。垣衣は遠べ。姑摩姫は出行べ。兄べ作を倶べ豫知る如意宝珠院へ赴べ。却説這日の未牌の時候潜べは喚門べ。両個の客は。一個は年齢五十有餘の法師は香染の腰衣は白樸の脚絆の紐を向頭は締做べ頭陀袋を項を掛け。右は八角の錫杖を衝鳴べ。左は菩提樹の平形金珠を持べ。又一個は年齢二十餘歳の武士は皂蛇皮絡の小袖は紺絶子の野袴を腰高は穿做べ紫縮緬の三尺帯を。乳海の邊は真結は腰は嗟物作の両刀を鷗尻は跨べ。相従は伴當五七名脚絆胸掛は行装べ。若黨は奴隷は左右は連れべ跪坐べ。登時隅屋安次は高は応べ玄関は出迎べ。何処より。と尋れべ行僧先答べ。拙僧は原大和の人。又是は一路人は伊勢は三ヨ氣の人氏と告は安次は裏は胸を鎮は然氣は。件は武士は視れべ武士は亦找は對べ當家は隅屋某甲と喚做は。御内人は隅屋生は對面

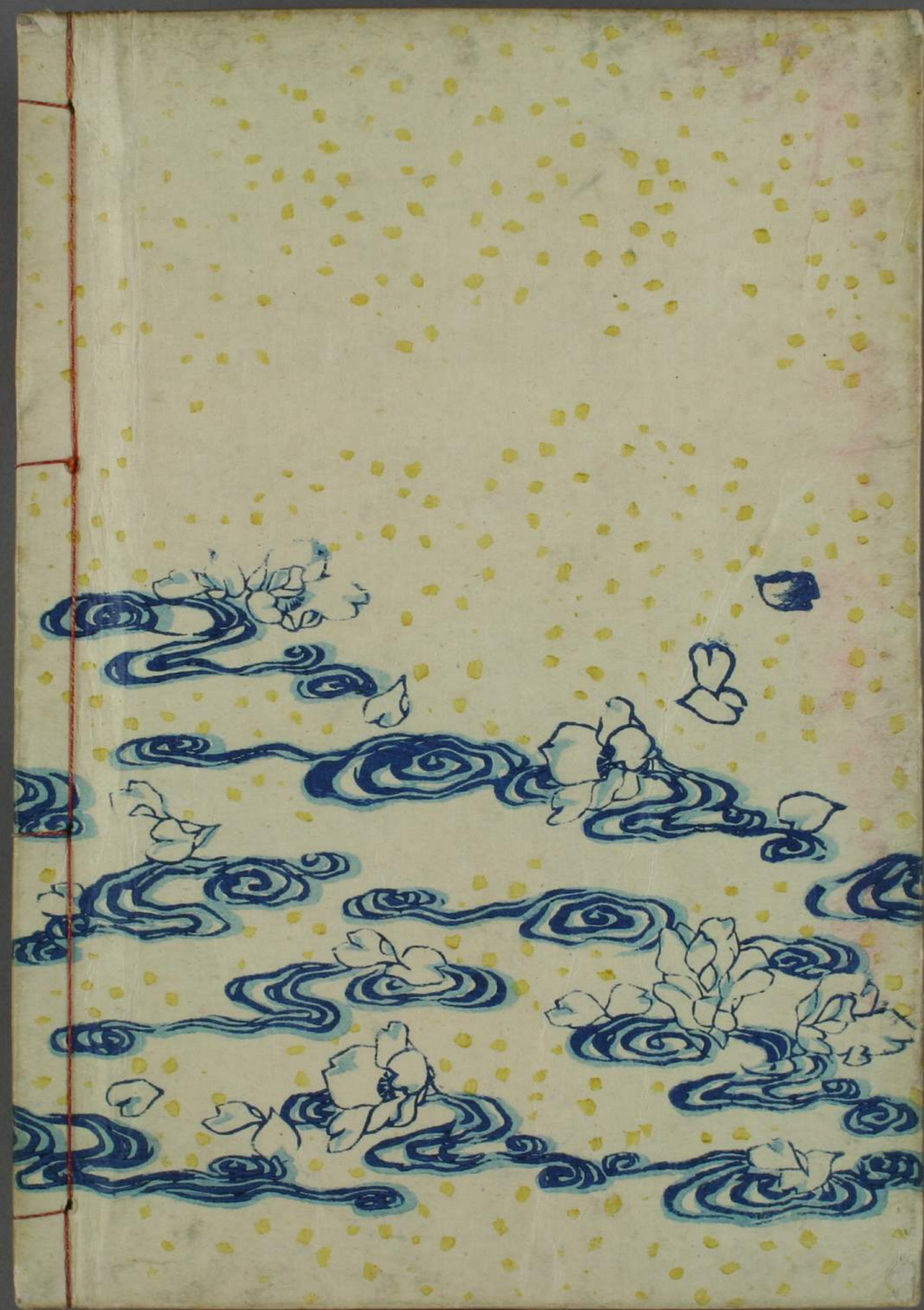
聲玉堂印行

老申入る迄一義あり。とかを安次次郎既に愚名を知れる。隅屋復一郎安次は則是小子多。御所要あらば美濃と名告るに行僧微笑て原来御邊が隅屋主多狭小雲時一席を貸し給へ端近に談話。とかを安次ろ沼て帰らば卒這方と先に立つ玄関の次の小房に請ぜれば法師も武士もうち續き寶の坐に着けり。當下又安次は件の二客の名字を問ふ。行僧答て拙僧は原是吉野の執行にて法名嬰云即是南帝御和親の後今も有小倉の仙院に仕へられ今年来嵯峨に在り。あらに今番小倉宮より姑麿姫御寮を憑せ給ふ一大事あるべし。拙僧は使を奉り御附屬の今旨あり。とかを胸に當て頭陀袋をうち敲けば武士も亦尊大に安次にうち對ひ咱ら則伊勢の國司北畠中将家。満泰を腹心の郎黨に鳥屋尾矢柄當実と吸寄めて目今道徳のおれたく小倉宮のおん義に就て姑麿姫刀祢へ寄らる。国司の書翰を齎し。秘密の使ひ。その餘の事は見参の折に傳へかし。主の女儀にたのもしく傳達せられよとい云又嬰云る凡繰る珠數を巻に纏ねて是私のるのあらぬ小倉宮より今旨を賜る御使僧なれば王の姫の出迎ふ迄とか。其頭の准備をいそれと頃きくられて安次は眉根を顰めて沈吟して。そもそもあらるくいへども姑麿姫様の月屬浮世を厭ひ垂髫竜く道高き大禪師或も貴人權家すら對面を允されねば何ら答禀きやうん料りかたと。来意の旨は仰の如く只今傳へいかんと心に奥に赴きく却姑麿姫に箇様々々と件の古又の趣を訴へ。さら生ら姑麿姫様に領きく。然ば我は今朝よりの客あんとぬ。須臾も幼小より伊勢の國司の城門に在り。甲斐に諸家臣の姓名は皆知りたん実に那藩中に鳥屋尾矢柄とか武士の狭迭に面を認ぬと。問れて安次然い鳥屋尾氏は伊勢の國司の是第一の家老なれば知らぬのいはぬ。それ矢柄當実とは庶流の親族狭名を知ざれば面善にもいはぬ。他も亦小可を認りくうとかるれ。その該のるのもいは伊勢の諸士已上るの経慮一千

聲玉堂印行

ろろろろみひきの石かあるれとも
せをとへごとくこまひきまくれかたもの
隔席姑摩姫面于両使
あせをちろろかゆるくものろた
安つぐ
有像第五十一



餘名あり。且小可が養父なり。品倉蜂六を新参の亡弓の足輕乞べ諸侍共親しかるに況や小可い那地の微賤の遊俠こければ諸侍の姓名を十が二三も知らぬ諸侍も小生を認りしかい稀多べ。とのよう姑麽姫又頷きて好々既ふ猜しうたが左まれ右もあれ我對面せん折ふ夢合せてあべ。却客房の左右多。重紙戸を快合放を換るふ二張の幕をもて老門共奴隷農僕們を召聚合分ち竜ら七物あるごくふ思いもべ。その間ぞ云を權しぬぞ。矢柄ふりんふ胆を冷さんふの它あるふい徒々と言ひ立地ふ耳へき示せば安次ハ且感し。且歓びて時を移さぬもく准備をもうけ。小程ふ姑麽姫ハ礼服ふ更めを梅香とふ婀嬛ふ護身刀を持しゃ出て客房の上坐ふ在り。登時安次ハ那小坐席ふ赴ぬ。頭を云當実们ふ答ふ。姑麽姫脚氣あるふり。迎接の弐ぞ意ふ儘せぬ倘その礼を競しあべ只今對面をべと云ふ。畢竟姑麽姫が両個の密使ふ對面の折。迭の応答甚麽ぞを次の巻ふ解分るを聽ねかし。

開巻驚奇俠客傳第四集巻之三 終